



種類が増えてきている糖尿病の飲み薬の話

津南町立津南病院

佐野 浩斎 先生

生活習慣病の代表疾患のひとつといわれる糖尿病の飲み薬の話です。いまでは信じられないという方も多いが、以前、糖尿病の飲み薬の種類は少なかった。90年代の α -G Iの登場や、2000年代メトフォルミンルネッサンスという大きな波もあったが、インスリン分泌促進薬グリニドの登場やインスリン抵抗性改善薬の参入もあり、糖尿病の飲み薬の種類は少しずつ増えていった。2010年代にはいと、糖尿病の飲み薬は大きな二つの波を迎える。

ひとつめの波はインクレチン製剤のひとつで飲み薬であるDPP-4阻害薬の登場である。当初は阻害薬ということからも生理的にどうなのかといわれたが、日本人に対しても際立った副作用も少なく、低血糖も起こしにくい飲み薬でもあったため、日本でもしばらくすると一躍糖尿病の飲み薬の第一選択薬のひとつとなった。

ふたつめは、日本では2014年に登場したSGLT2阻害薬である。腎臓に働き、尿から糖をより多く排出し、血糖値を下げる。この薬も当初は脱水や感染症やらの誘発の懸念から、慎重に適応を判断していた糖尿病専門医が多かったが、副作用も予想していたより少ないことがわかり、安心して投与できるようになった。いまではSGLT2阻害薬は血糖値を下げるだけでなく、糖尿病性腎症の予防効果や心不全リスクの低減効果など、さまざまな効果をあわせもつことも報告されている。SGLT2阻害薬には、多面的効果を持つ可能性のある薬剤として、糖尿病だけでなく、腎臓病や心臓病の患者さまへの投与も期待されている。

さて、これだけ種類も増えてきた糖尿病の飲み薬、何でも良いからとりあえず飲んでおけばよいのでしょうか。いえいえそんなことはありません。糖尿病の飲み薬の投与のポイントはそのさじ加減が患者さまひとりひとり違う点なのです。同じ程度のHbA1c値を示していても、適した糖尿病の飲み薬の組み合わせは異なります。インスリン動態を含めた病態もさることながら、生活習慣も患者さまによって異なるからです。

私は、現在町立津南病院で糖尿病・生活習慣病外来を担当していますが、初めてお会いした糖尿

病患者さまには、HbA1c値を含めた血糖コントロールに関して、まず半年間くらい様子をみさせてくださいという言葉をよく口にする。その患者さまに適した糖尿病の飲み薬の組み合わせを慎重にみつけるためです。時間に追われすぐに治療効果をみたい方は最初キョトンとされるが、説明をするとご納得頂ける。

糖尿病患者ひとりひとりにとって、自分に適した糖尿病の飲み薬の組み合わせをみつけることは、適した食事療法や運動療法をみつけることと同様に、とても重要なポイントなのである。

